

「十二景詩歌」より



高砂市域の歴史を考えるには水上からの視点が必要だという話をずいぶん前に書きましたが(史話13)、今回は魚崎村(現伊保町)の船をご紹介します。

魚崎を拠点とした船の活躍は中世に始まります。東大寺領の兵庫津北関に入港した船舶からの関銭徴収台帳「兵庫北関入船納帳(ひょうごきたぜきいりふねのうちょう)」が残っているのですが、文安二年(一四四五)頃、魚崎の船が十五回ほど登場します。そのほとんどは、九月十二月に数十石の米を積んだ小型船で、「兵衛」という人物の船です。元来この魚崎は神戸市東灘区魚崎だとされてきたのですが、高砂市域の魚崎に比定する意見もあります。文安の魚

崎船の米が「半双(はんそう)」という播磨独自の容器(升がわりに使用)に入っていることや、平安後期から鎌倉期にかけて加古川分流洗川の西側に「伊保」とか「魚崎」と呼ばれる湊があったことなどが根拠ですが、私も近世史を学ぶ立場からそれに賛成します。というのは、江戸時代前半に播磨魚崎の船が遠距離航海で活躍していることが確認できるからです。残念ながら、高砂市域に史料はほとんど残っていませんが、日本各地の港などに播磨魚崎船の足跡が残されています。

また日本海の港町酒田(現山形県酒田市)の記録のなかにも魚崎船が登場します。正徳六年(一七一六)五月、酒田の米の運送のため雇われて酒田湊に繫留されていた播磨魚崎の船頭三右衛門の船が大風洪水により沖に流され沈没してしまいました。この船は米一九六〇俵とその一五%にあたる運賃米を積んでおり、船頭以下一五人乗の千石船に近い大型船です。

これらのことから、魚崎の船は、中世にはおそらく加古川流域の米を兵庫津に売り込んでいた小型の近距離輸送船だったのが、江戸時代前期には大型化し、東北地方まで運航していたことがわかります。これらの船は市域でさかんだった製塩用の薪や塩、幕府・大名の年貢米などを輸送していました。江戸時代前期には瀬戸内海の塩飽諸島の大型船が活躍していたことが有名ですが、市域魚崎の船も同様の活躍をしていたのです。

(市史編さん専門委員

中川すがね)